

若木仇名草（わかきのあだなぐさ） 中 お宮くげし

へ云わねばいとどせきかかる 胸の涙のやる方なさ

お宮「アノ、蘭蝶どのと夫婦の成立、話せば長い高輪で、一つうち互に出居衆」

へ縁でこそあれ末かけて、約束かため身を固め、世帯固めて落ちついて、アア嬉しやと思つたは、ほんに一日あらばこそ

へそりや誰故じゃ、こなさんゆえ、大事の男をそそなかし、夜昼となく引きつけられ、稼業事は上の空、鼻屑で呼んでくださんす、馴染みのお客茶屋衆も、来る度ごとにまた留守かと、愛想つかされ後々は、呼んでくれても内証の、詰まり詰まって私が身を売って渡したその金を、またこなさんに入りあげられ、うれしかろうかよかろうか、腹が立つやら口惜しいやら、喰いつきたい程思つたは、今日まで日には幾度か、その恨みをも打捨てて、互のための心底話

お宮「コレ、ここをよう聞かしゃんせや、わたしじゃとて、根からの素人ではない、芸者勤めは女郎も同前、憂いも辛いもよう知つてゐるわいな、それに今では勤めの身、恋も意気地も身につまされての談合づく、どうぞ蘭蝶どのと縁切つて、ふたたび呼んで、くださんすな」

へとは言うものの、二人ながらこのように

お宮「盛んになっている最中、耳にも入るまい、ききわけあるまい」

へひとの意見はあしく聞き、せかるればなおつのも、果てはつまらぬ

お宮「無分別、ふたり死のうといふようになることもある習い、オオ道理じゃ、道理じやが、わたしが心にもなつてみてくださんせいなア」

へ蘭蝶どのに身を立てさせ、小商売でも始めさせ、人並み相応な暮らしもして、末々長う添おうとの、楽しみばかりに、恥も世間もかえりみず、身を沈めたる深川竹の憂き勤め

へひとにはわたしが好き好んで、売られて来たの、手切れじやのと、浮名立てられ指差され、くやしうて悲しうて、涙にはげしおしろいの、顔を直して呼び出しの、お客を勤むる苦しさは、どのようにあろうと思わんす、その辛さをばこれまで、こらえこらえたその代り、お前も今の辛さをば、こらえて切れてくださんせ、さすれば蘭蝶どのの身分も立ち、わたしも苦勞した甲斐もあり、お前も心を入れかえて勤め大事にさんしたら、主人の喜びその身の出世、三方四方のよいことは、ただこなさんの胸ひとつ、さあ思い切つて呼ぶまいと、ひとこと言つてくださんせと、ことをわけたる真実を、聞いて道理に伏し芝の